

# げんでん 福井 ふれあい

2010 SPRING 第36号



第11回 げんでんふるさと文化賞  
および 芸術新人賞 受賞者インタビュー  
生誕百年に寄せて「白川文字学」と福井(上)  
ふるさと福井  
人物シリーズ「食育の祖 石塚 左玄(二)」

財団では、2月7日（福井県ふるさとの日）に第11回げんでんふるさと文化賞ならびに芸術新人賞、およびふるさと大賞の表彰式を日本原電敦賀地区本部会議室（敦賀市本町2丁目）で行いました。加藤理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、顕彰額を贈り栄誉をたたえました。今回受賞されたら名の方々に受賞の感想や今後の抱負をお聞きしました。



第11回 げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞  
および ふるさと大賞写真コンテスト入賞者の表彰式  
(2月7日 日本原電敦賀地区本部)

についての信条をお聞かすると「風車をもつまま描いても平凡なもので絵にならない。」



吉村外人さん  
＜福井市＞

詩情豊かな重画を書き続けている吉村さんに、今回の受賞の感想をお聞きしました。「正直びっくりしました。私の重画が県民文化の発展に寄与したとして表彰される事は誠に光栄であり、本当に嬉しいですね。」と静かに話して下さいました。また絵画

### 一番大切なものは真実の発見

四苦八苦をくり返し、何とか一つの真実を発見する。その真実を元にして絵を作るのです。一番大切なものは真実の発見で、真実の発見は作者に勇気を与えてくれます。」と話して下さいました。福井の文化創造については「教える側も学ぶ側も好奇心と情熱がなければならぬ。ここに活動の発展があるのです。」と自らの考えを披露していただきました。

### 生涯漁師の生きざまを描き続けた



貝井春次郎さん  
＜高浜町＞

高浜漁港が目の前に見渡せる二階のアトリエに貝井さんを訪ねました。現在でも現役の漁師として春はワカメ採り、夏はタコ採りを行い、その間に精力的に創作活動

## 第11回 (平成21年度)

## げんでん

## ふるさと文化賞 芸術新人賞

吉村さん(絵画造形)・貝井さん(絵画造形)・師田さん(茶道・地域文化活動)  
上野さん(書道)・山崎さん(音楽・打楽器)



財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆりのある地域づくりに寄与することを目的としています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にしたい広報誌を目指します。

## CONTENTS — 36

- 第11回げんでんふるさと文化賞および  
芸術新人賞受賞者インタビュー ..... 2
- 「白川文字学」と福井(上) ..... 4
- ふるさと福井・人物シリーズ  
「食育の祖 石塚 左玄(二)」 ..... 6
- 第12回 ふるさと大賞 写真コンテスト ..... 8
- ふくいの伝統行事シリーズ  
「河原神社神事」 ..... 10
- 敦賀市立博物館誌上ギャラリー / 30 ..... 11
- 福井の文学碑  
「作家 関高 健」 ..... 12
- 福井の民俗文化  
「刀祖・氣比神社の秋祭り」 ..... 13
- 情報ファイル ..... 14

## FRONT COVER



## 福井県指定 無形民俗文化財 「河原神社神事」 (若狭町)

「酉の日神事」とも「お七厘の神事」とも呼ばれる、若狭町上野木の河原神社は、今年も旧正月の初酉の日の後の3月7日の前日早朝から古式ゆかしく行われました。6日朝早くから七厘会館で機織や祭主の商談、鏡威、区役員などが出役して餅つきが盛大に営まれ、ハナビラモチや白餅・白強飯・芋ぐち・豆ぐち・鏡餅などの神饌を始め、しめ縄・大御幣・小御幣などを整えて、7日午前零時に神迎え、午前6時に神幸のあと、河原神社で厳かに祈念祭を執行。氏子に直会が配られ、長床での神事講で次年度の祭主と機織に当渡しが行われました。

(詳細は本誌10ページ参照)

## ふるさと文化賞

**吉村 外人さん**（結城造形）  
 福井市（83才）  
 昭和23年から39年間、福井県の公立中学校美術教員を経て、平成6年から8年間、私立高校の美術講師を務めた。  
 結城造形「協会」「現代美術会」の会員として、ヨーロッパの古建築をモチーフにした情豊かな作品を描き続けています。  
 平成9年「現代美術会」で文部大臣奨励賞受賞。平成16年フランス「カルセル・ドゥ・ルーブル」美術の解放展で芸術大賞を受賞するなど国内外の各種展覧に出展し、優美な作品は高い評価を受けています。

**目井 春治郎さん**（結城造形）  
 高浜町（76才）  
 現役の海師で漁業に従事の間、独学で絵画を学び、生活の場である海と漁師、漁をテーマに多くの作品を創出。昭和28年福井県総合美術展に初入選。昭和36年東京芸友会に「鯉」入選。昭和44年市展に「たこ」入選。昭和46年市展に「たこ」入選。昭和48年市展に「たこ」入選。昭和50年市展に「たこ」入選。昭和52年市展に「たこ」入選。昭和54年市展に「たこ」入選。昭和56年市展に「たこ」入選。昭和58年市展に「たこ」入選。昭和60年市展に「たこ」入選。昭和62年市展に「たこ」入選。昭和64年市展に「たこ」入選。昭和66年市展に「たこ」入選。昭和68年市展に「たこ」入選。昭和70年市展に「たこ」入選。昭和72年市展に「たこ」入選。昭和74年市展に「たこ」入選。昭和76年市展に「たこ」入選。昭和78年市展に「たこ」入選。昭和80年市展に「たこ」入選。昭和82年市展に「たこ」入選。昭和84年市展に「たこ」入選。昭和86年市展に「たこ」入選。昭和88年市展に「たこ」入選。昭和90年市展に「たこ」入選。昭和92年市展に「たこ」入選。昭和94年市展に「たこ」入選。昭和96年市展に「たこ」入選。昭和98年市展に「たこ」入選。昭和100年市展に「たこ」入選。

**師田 一郎さん**（茶道・地元の文化）  
 鯖江市（72才）  
 師田製茶所を継ぎ、越前陶芸村の発展に尽力。県陶芸会館の茶室「越前完成（昭和45年）」にちなんで茶道愛好会を結成。昭和59年に正式に茶の湯同好会を26人に結成。平成7年から現在まで会長を務め、現在会員は250人に達している。  
 茶の湯の文化にとらわれず、本県ゆかりの陶器天心を学び季節ごとに茶会を開き、茶の文化普及発展に努めています。また「雨乞い神事」の復活など地域活性化事業にも積極的に関与し、地元の発展に貢献しています。

## 芸術新人賞

**上野 智子さん**（書道）  
 敦賀市（49才）  
 かな書を山本雅堂氏に師事。おらから伸び伸びとした筆法でダイナミックな表現で作品を創作発表。これまで平成12年に近江神宮献書会展で守口市市長賞受賞。平成13年敦賀市総合美術展で教育委員会賞受賞。平成17年県書道展で準特選受賞。平成21年県美術で知事賞受賞。作品における文字の構成、線の切れ味に加え、墨色の変化の美があり、感性豊かな作品を創出しており、本県書道発展に今後大いに期待されています。

**山崎 智里さん**（音楽・打楽器）  
 福井市（30才）  
 打楽器を岡田知之、今田三朗、マリリンバを神谷昌子、ロバート・ヴァン・サイスの各氏に師事。平成16年第3回北陸新人音楽コンサートで最優秀賞を受賞。オーケストラ・アンサンブル金沢と共に、平成16年第1回中部打楽器新人演奏会第1位。平成18年世界マリリンバコンクール in オーストラリアでセミファイナル出場。  
 県内在住の若手マリリンバ奏者として、多くの演奏活動を行うとともに、後進の指導に当たり、今後の更なる活躍が期待されています。

## 私心を入れず公の為に

これまでに鯖江市選管委員長をはじめ鯖江市公民館懇話会委員長等、市や県の公の仕事に長年携わってきた師田さんを鯖江市の自宅に訪ねました。今回の受賞をお伝えすると「私は芸術家でもありませんし、茶の師匠でもありません。今まで縁あって茶の湯同好会の世話役として働いてきただけです。評価をいただきありがとうございます。今日まで」と控えめに話されました。



師田 一郎さん  
 <鯖江市>

立ち上げ、「鯖江体操のルーツ」等の企画で地域の皆様に喜んでいただけたのが嬉しいですね」と地域活動についても抱負を語っていました。

## 作者の心情 思いながら書きたい

上野さんに今回の受賞の感想をお聞きしました。「とても信じられない気持ちです。今までご指導いただいた先生方に心より感謝しています。今後ともこの賞をキッカケにもっと頑張らなければという気持ちを持ちました。」と素直な気持ちを話していました。



上野 智子さん  
 <敦賀市>

強しかったです。詩や短歌の課題作で作者の心情、肉体的状況をできる限り理解し、自分に照らし合わせて書くよう努力しています。」と語っていました。

又かな書の魅力については「やさしさや力強さ」であり今後とも、初心に戻って古典書を学びとともに、「地元の子供達に習字教室を通して、書の魅力を伝えていきたい」と笑顔で今後の意欲を示していました。

## 将来はカーネギーホールに

県内在住の若手マリリンバ奏者として活躍している山崎さんを、福井の自宅にお訪ね



山崎 智里さん  
 <福井市>

ができた事が、マリリンバに進む大きなキッカケとなりました。できれば福井でソコでリサイタルや、将来はニューヨークのカーネギーホールにも立ちたいです。」と熱い思いを語るとともに、「今後とも積極的に演奏活動をしながらか後進の育成にも力を注いでいきたいです。」と抱負を述べていました。

し、今回の受賞の感想をお聞きしました。「大変驚きました。とても嬉しいですね。この賞をきっかけに活動の幅が広がっていくような頑張ります。」とにこやかに話して下さいました。これからの抱負などについてお尋ねすると「私は打楽器をやっている、平成18年世界マリリンバコンクールにおいて、マリリンバの世界的権威者ロバート・ヴァン・サイスに認められていただき教を請う事

# 「白川文字学」と福井(上)

## — 卒寿で里帰り講演 —

文：佐野周一

筆者プロフィール



佐野周一氏  
Shuichi Sano

1942年(昭和17年)12月、福井市生まれ。金沢大学法学部卒。1965年、福井新聞社に入社。新聞記者30年の経歴を経て、同事業局長、専務取締役、特別顧問などを歴任。2009年6月に退任した。県の教育文化ふくいき創造会議議長代理などを務めた。現在、県詩人懇話会副代表、日本文学文化機構文字文化研究所理事。

今年には福井市出身で福井市名誉市民、文化勲章受章者の漢字学者白川静氏生誕100年に当たります。そこで元福井新聞事業局長・専務取締役・特別顧問を務めた佐野周一さんに「生誕百年に寄せて「白川文字学」と福井」と題して、本誌(上)(中)(下)に分けて執筆をお願いしました。(財団編集係)



白川静氏

00年)11月1日だった。  
福井新聞社と漢字文化振興会主催による「漢字文化セミナー(福井)」の講演会が福井市フェニックス・プラザ小

ホールで開かれ、メインの講師として招へい(礼を尽くしてお迎えすること)された。540人の聴衆で満席、福井新聞社の吉田取次社長(当時)が「新聞紙面にも最近には仮名があふれているが、改めて日本語の魅力を取り戻す時期にきている」とあいさつした。白川先生はその2年前の平成10年(1998年)11月に「文化功労者」として、同じ立命館大学で学んだ本県出身の作家、水上瀧氏と一緒に顕彰された。当時、立命館大学の名誉教授をされていたが、執筆や文字講話など第一線で活躍。とても90歳には見えないほど迫力ある声で、一時間半あまり「漢字の文化、国語の将来」と題してステージに立ち放しで、白い紙を貼ったボードに、複雑な古代文字を次々と、50枚あまり書いて、どのように漢字が作られてきたかを解説した。

「見てすぐ分かるのが漢字の特徴」「漢字は難しいという人も居るが、意味を知れば分かりやすい」と力説。また「世界の一文化(グローバル化)が進んでいるが、漢字文化の背骨となる東洋の文化と伝統は何としてでも守らなければいけない」と熱く語った。その風貌(ふうぼう)すがた

### 故郷で培った素養がベースに

しかし、実は戦後初めて福井に帰ってきたのは、昭和26、26年ごろである。白川先生は昭和20年(1945)の終戦の年に35歳で立命館大学文学部助教授になった。中国近代文字学の基礎研究に拍車をかける傍ら、戦後の国語教育政策に反対して、漢文の教科書を作った。その普及宣伝も兼ねて、北陸で説明会を開いたが、その時、福井市公会堂で講演をしている。全く無名だったこと、今日では60年もたっているから、そのエピソードを覚えている人はもういないだろう。

2000年の講演は、福井では戦後2回目になる。11月25日の福井新聞特集面に掲載された講演趣旨によると、

「私は福井市出身で、順化小を卒業するまで住んでいたのだが、小学校上級のとき、夏の早起き会に参加、暗いうちに足羽山の藤島神社に参り、山をめぐって継体天皇の石像まで行き、日の出を拝んで体操したことを覚えてい

## 20世紀日本を代表する人文学者

生涯のテーマとして追求したのだった。平成11年（1999年）の12月1日から30日まで、日経新聞の最終面に30回にわたり、白川先生の「私の履歴書」が連載された。すでに「字統」「字訓」「字通」の字書三部作を完成。これらの成果により毎日出版文化賞や菊池寛賞などを受賞、また前年の平成10年には、文化功労者として顕彰され、メジャーな学者、文化人として知られるようになっていたが、福井市出身といってもその来歴や学者としての歩みを詳しく知っている人は少なかったと思う。この「私の履歴書」の連載を読んだことをきっかけに白川先生の著書を読んだり著名な学者、文

化人の評などを散見するにつけ、戦後の日本を代表する、いや東洋を代表して世界に誇りうる人文科学（人類の文化に関する学問）者が、福井人であることに、胸が熱くなったものだ。

その「私の履歴書」一回目に「東洋」ということは、中国にはない、もし用いるとすれば、それは日本人を蔑しんでよぶときだけである。東洋という語はわが国で発明された。西洋の科学技術に接した蘭学者たちが、西洋の科学技術に対立するものとして「東洋の精神」「西洋の医術」という表現をした。佐久間象山も、郷土の先覚である橋本左内もこの語を用いている。これらの両文化に対する深い洞察を感じるのである」と書いてある。

そういえば、以前に「東洋鬼が来た」という中国映画を観たことがある。満州を侵略した日本軍のことを、東洋鬼（トン・ヤンキー）と呼んで戦争犯罪を告発する映画だった。

白川先生にとっては「東洋」と「故郷」が生涯の大仕事を貫くキーワードだったと思うを得ない。

### 白川「漢字の世界」に学ぶ歴史

講演会が終わった後、福井新聞社事業局でこの講演会「漢字文化セミナー」の企画を担当した事業局次長の五十嵐利幸さん（現在、執行役員事業局長）と2人（筆者は当時、事業局長）で、福井市片町通りの和食の店に



古代文字ノート

京都市内で入院しているから」と、午後8時7分、JR福井発のスーパー雷鳥で帰京した。

つる夫人とは夫婦仲の仲よいご夫婦だったが、白川先生が決断を迷った時、例えばいろいろな賞をもらう場合「どうする」と奥様に相談すると「もらいなさいよ」と、つるの一声、だったそう。

この半世紀ぶりの里帰り講演会は、後にとても大事な文化の、財産を生んだ。当時の西川副知事と酒井福井市長が、講演会場のフェニックス・プラザを訪れ、白川先生を表敬訪問したのだ。西川知事は早くから注目していたらしく、そこでの出会いが、10年後の今日までの「白川文字学」を柱とした「文字の国」を発信する本県独自の教育文化政策の展開につながったのではないかと思う。

福井のこと私たちは、今、学校で当

たり前のように、白川先生の「漢字の世界」を学んでいる。他県にない先進的な取り組みとして、将来、新たに人材を輩出していく、福井県人としての豊かな土壌を形成していくことだろう。



字書3部作



漢字の成り立ちを説明する白川先生

# 食育の祖 石塚左玄 (二)

左玄を支持・支援した明治の偉人達

文／岩佐勢市

筆者プロフィール



岩佐 勢市氏  
Seiichi Iwasa

1949年福井市に生まれる。鳥取大学卒業。JA経済連・JA厚生連に奉職。2007年からJA福井県厚生連理事長。職務の関係から住民健康管理のうえで、特に子供の食育に注目。現代の子供達の食生活の乱れを憂う。自らもスローフードの研鑽ならびに、福井市生まれで食育の祖と言われる石塚左玄の研究を進め、業績の紹介とともに、食育の重要性の啓蒙と、食と運動による健康づくりを提案している。石塚左玄の業績に詳しい。

時は明治。鹿鳴館華やかかりし頃で、何もかも洋風化導入が進められ、波乱に富んだ時代の中で、ややもすれば復古的食生活とも言える左玄の提案を無視する人達もいました。しかし逆に彼を心底支援する、新しい明治を創った維新の要人も多く存在しました。福井藩出身者も数多く活躍した明治政府ですが、同郷の偉人達も左玄を支持していました。今月は左玄の薦めた日本伝統の食生活に心酔し、活動に大きな力を与えた所縁の人物を紹介いたします。

## 明治医学発展の大功労者 橋本綱常



はしもとつねつね  
橋本綱常  
(1845～1909) 橋本左内の弟。福井藩でドイツ留学後、万国赤十字会加盟のために奔走。陸軍軍医副監、陸軍省医務局長等を経て東京大学教授、初代日本赤十字病院院長、東京府立病院を歴任。近代医学の最大の功労者である。

の功績があり、左玄は「今、私があるのは綱常候のおかげ」と公言しています。両者の実家も極めて近く、左玄が初めて上京した時、転がり込んだのは綱常の家です。



ゆりきよまさ  
由利公正  
(1829～1909) 福井藩士で藩の財政改革に取り組み、生前の坂本龍馬からの依頼もあり明治新政府でも財政を担当しました。五箇条の御誓文の素案を作り、明治4年に東京府知事・明治5年岩倉具視等と欧州視察後子爵を経て議員。

## 明治の大物政治家も一目を置く 谷 干城

谷干城は同じ土佐藩出身の坂本龍馬を尊敬していましたが、明治の大物の思想は農本主義として現れています。この考えと相まって、谷は左玄の主張する食養論に心酔していました。それを証明する書状が残っています。横山嬢が谷に左玄への紹介状を書いてもらい、左玄に衛生等について教えてほしいという依頼文です。横山嬢が直接左玄に会いに来た時のもので封筒は現存しますが、郵便でなく年号がわかりませんが、左玄の食医や食養生について評判も高く、当時

石塚左玄の生涯に影響を与えた人物を語る時に、最初に登場するのが橋本左内の弟・綱常です。左玄の人生の大半を、綱常が常に後ろ盾に

遺体の防腐処理をしたいということでした。左玄は陸軍時代に、独自で工夫した死体貯蔵法を開発した経歴を持っていた。左玄は食養学のみならず、防腐法等の医学的処置にも優れた技術を持っていたことが伺われます。

## 「五箇条御誓文」で知られる由利公正

由利公正は郷里の大先輩ですが、両



明治40年「化学的食養雑誌」創刊号

その会の賛成者として、川邊道徳、伯爵を

## 谷 干城

(1837～1911) 土佐藩士で薩摩土佐同盟を結び、戊辰戦争で戦果を上げる等明治維新功労者の一人。西南の役で陸軍中將・士官学校長を経て第2代学習院院長を歴任。子爵となり貴族院議員を務める。

しませんが、郵便でなく年号がわかりませんが、左玄の食医や食養生について評判も高く、当時



左玄への書状

そ左玄からこ



## みつめてみよう～ふるさとふくい

ふるさと大賞  
写真コンテスト

平成十年度より郷土福井の自然、歴史、文化等の地域資源を題材とした「ふるさと大賞」写真コンテスト顕彰事業を行っています。  
第12回目となる21年度は、過去最多の750点の応募がありました。審査の結果、59点の入賞作品（別表のとおり）が選ばれました。

ふるさと  
大賞三上 彰氏さん  
(福井市)

「蒸気霧立つ」

750点の中で、特にハッと思わされたのがこの作品でした。そこには、霧が立ち込め光降る中、二人の姿と朝倉氏遺跡の門がシルエットとして描かれていて、叙情的な写真に仕上がっています。戦国時代の在りし日の風景が想像できるほど、良い出来映えです。吉き時代の朝倉門の姿を、冬という季節を考え、また門に降り注ぐ光の、刻々と変わるある一瞬を的確に捉えた写真は「ふるさと大賞」にふさわしい作品となっています。作者の力量がうかがえます。

(講評/八木 隆氏)



一般の部「オバマ OBAMA 小浜」

真っ青な空と白い雲、コバルトブルーの海を背景にフラダンスを演じる女性たち。米大統領選のオバマ候補の応援団として話題を振った「おばまガールズ」。そろいの黄色い衣装が華やか。両手を差し出し微笑む姿は美しい。照りつける陽光しが踊り子たちをいっそう輝かせています。青空を大きく入れた構図は広がりを感じます。小浜灘の風景に絶妙に溶け込んでいてハワイと見間違ふほど。南国風情溢れるホットな作品に仕上がっています。

(講評/勝山 章司氏)

ふるさと賞



一般の部「ふるまい酒」

女の子が楽しそうにおどけた獅子にお酒をふるまっています。みんなの笑顔がはじけ、祭りの盛り上がりが伝わってきます。青年と女の子と獅子の動きが横一列に連なり、シンプルな構成ながら、躍動感を生みだしています。後方の観客もうまうまとり込み、無駄のないトリミングで仕上げました。

(講評/水谷内健次氏)

寺尾美代子さん(福井市)

作品展示会場

これらの作品を多くの方に御覧いただくために  
県内2会場で作品展示会を開きました。

敦賀会場

—こッパギョウめんどろー

2月2日(火) ~ 2月14日(日)

福井会場

「レス」ゾグンゾグン

2024年12月24日

圖書

西貢新聞  
西貢新聞

八木

11

三好

勝巳（株）フシカラー北陸福井支社長

山

聯可（救世并新聞社編集后与真秋傳社長）

男

學生(福井県立美穂館学芸員)

水竹

目内體次 (与頁次)

10

眞治（財団法人げんてんふれあい福祉財団理事長）

趙木

繁(日本原子力発電株

理事・敦賀地区本部業務・立地部長

(152-425-202)



一般の部「清流に遊ぶ」

夏の暑い日、涼を求めて水遊びをする少女。濡れないように赤いスカートをちょっと上げた仕草が可愛らしいですね。小川一面に生い茂っている梅花鱒はきれいな清流の中でのみ生えるということで、水面の上に映がせた白い花や所どころ陽が射し反射した水面や清流の透明感がとても涼しげで幻想的です。福井のすばらしい自然や環境をこれから後世の子供たちに残していきたいです。

(講評／三好 謙巳氏)



一般の部「一息入れて」

祭りの合間に一息つく人々を、ローアングルから生き生きととらえました。笑顔が画面からあふれる色彩やかな衣装も華やかさを添えています。祭りとは、老いも若きもいっしょになって、晴れ晴れと楽しむ行事であることを再認識させてくれる作品です。

(講評／水谷内健次氏)



学生の部「いよいよ出番」

費を率納する4人の乙女たち。カメラは舞台裏に忍び込み、本番へと踏み出す瞬間をとらえました。静から動へ、不安とためらいから決心へ。影から光へと向うグラデーションの中に、起承転結のポーズが浮かび上がり、少女らの心の変化を見事に形象化させています。床の上置を隠して、人体のシルエットを平面的に見せる構図も見事で、連続写真のような効果を助けています。モノクロに印刷することで、劇的で品格の高い1枚に仕上がりました。

《講評／野田 創生氏》



一般の部「光 芒」

両脇に子どもを抱きかかえ火渡りをする修行僧。待ち構える僧も優しく見守っています。うっそうとした木々の枝の隙間から差し込む光の筋。赤く燃える炎と白く立ち込める煙が幻想的な雰囲気を感じさせています。木漏れ日と右サイドからのストロボと思われる光線が効果的で、人物をくっきりと浮き上がらせています。火渡りは足元を踏んで揺れることが多いのですが、風景を原現して静寂な荒行の雰囲気を引き出しています。

(請詳／請山 意司在)

入賞作品一覽 (敬称略)

[illegible]

# 福井県指定無形民俗文化財 「河原神社神事」

若狭町



社殿のない河原神社の神域

**概の繁に集った小さな神**  
八百万の神とはよくぞ言ったもので、アミニズム（精霊信仰）に起源をもつ日本の神々は、一神教のような絶大な超越神ではなく、種種多様な祭神や人格があり、決して一様ではありません。若狭町上野木に鎮座する河原神社（河原明神）の祭神について「若狭郡志」や「若狭管内社寺田部記」は祭神・由来を不詳としておりますが、地元の伝承ではそのむかし、御神体が概（アカメガシワ）の葉にのって天から舞い降り、上河原字牟田の淵に降臨されたといわれています。手の上に集るお雛様のような、なんとも小さな可愛らしい

神様のお姿が目に見えるようです。しかも当社は、野木山麓に点在する泉岡一言神社や彌和神社、加茂神社上の宮同様、社殿のない神社として知られ、端垣をめぐらし「御殿」と呼ばれる河原石を敷き詰めた禁足地には杉やタブ、シイ・サカキ・ムクノキなどのこの神木のほかにはなにもなく、いかにもすがすがしい神さびた空間を醸立させています。河川敷を開き、神社を中心にして七軒の家が並ぶとして住み着いたので、当地は通称「七屋」とも言い、この神事を「お七屋の神事」とも称しています。

## 西の日の神事の餅まきと「百味の飲食」

当社の例祭は、大正以前は正月と11月の初酉の日の2回行われ、秋の例祭の霜月神事は現在は式典のみとし、旧正月の初酉の神事を主に奉斎しており、神事講の主催者である長老（禰宜・社守）と10歳前後の家の世継ぎが中心になって執り行われます。霜月神事の「みと立ての行事」で祭主の名が披露され、禰宜とともに一年間きびしい精進潔斎をして神様に奉仕をいたします。3月の初酉の日前後（今年は3月7日）の一週間前に小浜の海で垢離（カクリ）かきをして不浄を去り、その際に潮水と浜砂利を持ち帰



揚ぎたての餅を籠居につける

農民にとって幸甚な春歌風の工口チックな餅揚ぎ歌は、性の興奮、発情をうながし、その情念と呪力によって大地の精

り祭主の家を清めます。毎日潮水を沸かした風呂に入浴しないと御殿内には一歩だに立ち入ることはできません。祭りの前日早朝から祭主の家（もしくは七屋会館）に禰宜・氏子総代・区の役員・当番などが集まって餅を揚ぎ、神饌のハナピラモチや辛酒・甘酒・白餅・白強飯・饅頭・あられ・豆くち・芋くち・焼き物などのいわゆる「百味の飲食」や大御幣・しめ縄などが整えられます。にぎやかに伊勢音頭や大谷口音頭、真喜地音頭、千秋楽を歌って氣勢をあげ、神杵で餅が揚がれますが、その真喜地音頭の一節。

下から見れば八重桜（以下略）  
しつこいけれど櫓に乗せて

下から見れば八重桜（以下略）



神饌のハナピラモチを揚ぐ

霊をよびさまして作物の生産力を高め、豊作をもたらすと信じられてきました。つきたての餅を杵で梁や轆居にこすりつけて懸置（けんけい）よけや栄養のあかしとします。

## あかつきの神幸と直会

祭りの日の午前零時、当屋の床の間の御簾に神主によって河原明神を迎える神事を行った後、午前6時に台傘持ちを従えた神主を先頭に、禰宜・祭主、かすかすの神饌の捧持者が行列を整え、村通りを「まいられのー」と声をかけながら晩間のなかをおごそかに神社へと向かいます。綿帽子をかぶった2人の料理持ちの少女は、ところによつてはミコンカキなどと呼ばれ「人身御供」をあらわしているともされているもの。

御殿前に全員が正座して、祝詞・玉串奉奠などの神事後、祭主が大御幣を参列者の頭上に振って一年間の災厄



祭主によるお祓い

を祓い、神札や直会を氏子に配り、長床で神事講を行い次年度の引きつぎが行われて西の日の神事は無事終了となります。豊作を感謝し祈る年頭の祈年祭にこめられた、日本古来の民俗信仰。豊かな若狭の風物詩がここに息づいています。

桃花曲水之図

一幅

原在中筆



桃は、種の核が二つに分かれることから「兆し」を意味する果樹とされ、また鮮やかな花は辟邪の力を持つと考えられており、その呪術性から、中国では紀元前に陰陽道の思想と結び付けました。

本図は、三月三日に宮中で催される「曲水の宴」をあらわしたものです。その起源は桃花水（桃の花びらを流した川の水）を飲んで禊（みそぎ）をし、穢れを払うという、桃の霊力にまつわる中国古代の行事

から興ったといえます。後に文人たちの間で、庭園や山荘などに巡らせた流水に酒盃を流し、その杯が上流から自分の前へ流れてくるまでに詩歌を作るようになったことから「曲水の宴」と称される風雅な遊びへと変化していきました。我が国では、始めは人形に罪や穢れを移して川に流す儀礼として三月の第一巳の日である「上巳」に行われていましたが、大宝令により三月三日に節日が定められました。

画面に目を移すと、川に浮かべた鷺鷥の杯が流れ、岸辺の帳幕の向こうには水瓶と満開の桃花が配されています。本来なら、詩歌を詠む人物が描かれているはずですが、本図ではあえて人物を描かずに留守模様にする事で、より観者の関心を引くよう配慮されています。

筆者の原在中は京都の人で、一説に小浜藩主・酒井家と縁りがあるとされています。画を狩野派の石田闇汀に学び、大和絵を独学で習得しました。

主に宮中、公家、寺院の襷絵や調度品の御用を勤めて活躍しました。天保8年（1837）88歳没。

□ 絹本着色

□ 縦108、横41、0cm

□ 江戸中期

□ 落款 八十翁原在中画

□ 印章 「原印」白文方印

「子畫」白文方印

# 福井の文学碑

## 作家 開高 健



開高健の石碑（悠々として急げ）

### 福井の酒とカニと海を受す

坂井市丸岡町一本田福所の国道8号交差点を北に向かつて左折、あわら市の旧金津町に向かう県道に入ると、す

福井ゆかりの芥川賞作家、開高健が亡くなって昨年は没20年。明けて2010年のことは生誕80年。作家であり、ノンフィクションライターであり、世界の辺境や戦場に行く旅人、そして釣り人。越前力二は「世界一」とパリバリ食し、酒と福井の海を愛した行動する文学者開高健とは、いったい何者だったのだろうか。没後、年月を重ねるごとに、存在感が増し、その人文学・への人気が高まっています。

ぐ「0.3キロ、開高健文学顕彰碑」と書かれた標識があります。矢印に従って田んぼ道を進むと、一本田福所集落改善センターに着く。その前方の広場南側敷地に「悠々として急げ」と刻された大きな自然石がどかんと鎮座しています。

この場所に開高健の碑があることを知っているのは、地元の人か、よほどの文学ファン、とりわけコアな開高ファンだけだろう。この文学碑は丸岡町文化協議会、丸岡五徳会など3団体と39人の個人で構成する顕彰会により七回忌に合わせて、平成6年（1994年）に建立されました。

### 丸岡町一本田福所がルーツ

それというのも、開高健の祖父、弥作と祖母、中野力ネがこの地、一本田福所の生まれで、明治27年（1894年）に結婚したあと、大阪に移住。そこで二女、文子が生まれ、後に坂井町福島、北川由三郎の三男、正義をむこ養子に迎えます。そして昭和5年（1930年）12月30日、父・正義と母・文子の長男として、大阪市天王寺区東平野町一丁目生まれ。父は大阪市内の小学校訓導（教師）をしていましたが、昭和18年（1943年）、13歳の時に死去。働きながら学び、一



開高健の家系図

ばいに飲んでベルトを締めて空腹に耐えたり、本屋で立ち読みをして本一冊読んだ逸話が残されています。

### 行動する文学者として活躍

大学卒業後、洋酒の酒屋（現サントリ）宣伝部に入社し、コピーライターとしてヒットを連発。昭和33年（1958年）、「裸の王様」で第38回芥川賞を受賞し、文壇に華々しくデビューしました。以来「輝ける闇」（昭和43年）「毎日出版文化賞」、「玉砕ける」（昭和54年）「川端康成文学賞」など名作を次々と発表。大江健三郎、石原慎太郎らと共に日本現代文学の作家として活躍する一方、昭和40年にはベトナム戦争の最前線取材した「ベトナム戦記」を世に問い、大きな反響を呼びました。米軍に同行し、従軍取材中、ベトナムに包囲された。所属部隊の2

家を支えて、大阪市立大学を卒業。その苦労ぶりは、中学生のころ昼の弁当を用意出来ず、手洗い場の水を腹いっぱい飲んで、大坂市立大学を卒業。その苦労ぶりは、中学生のころ昼の弁当を用意出来ず、手洗い場の水を腹い

00人中17人が生き延びて、死地を脱出するといふうさざまじさでした。ベトナム取材には3回出かけています。

アラスカやモンゴルの約り紀行も含めて、昭和56年（1981年）一連のルポルタージュ文学により、第29回菊池寛賞も受賞しました。

### 福井は「いやしの隠れ里」

昭和40年12月、暮れも押し迫ったころ「開高氏から漁師の宿のような旅館はないか」と依頼された旅行雑誌「旅」編集部の紹介で、一人で越前町梅浦の「こはせ」旅館を訪れました。それ以来平成元年、59歳で亡くなるまで、里帰りでもするようになり、たびたび投宿。開高より2歳年下の「こはせ」当主の長谷政志さん（77歳）は「先生は豪快で、気さくで、心優しい素晴らしい人でした。記憶力が抜群でした」と懐かしむ。開高は出自のことは書いていませんが、越前海岸の水仙の魅力や越前力二の味については、エッセーにしています。大阪で生まれ育った、きつ粋の「大阪人」ですが、その隠されたDNAは福井人そのものでありました。



福井新聞社・風の森ギャラリーでの記念写真展

# 福井の民俗文化

暮らしの  
— 古典 —

シリーズ1

## 刀根・氣比神社の秋祭り

財団では今回「福井の民俗文化」シリーズを今後10回程度で取り上げていきます。現在過疎化・少子高齢化が進む中で、ほぼそなわらも毎年継承されている県内各地の貴重な祭礼行事について、「若狭路文化研究会」の会員に、伝承文化の意味や意義、歴史などをやさしく解説していただきます。（財団編集係）

### お祭りのお供え

敦賀市刀根区の氣比神社の秋祭りはその伝承内容の豊富さで知られ、四月初頭の春祭りとして併せて敦賀市指定の無形民俗文化財となっています。

秋祭りは「ミヤアゲ（宮上げ）神事」と呼ばれ、ニュース等では早朝から行われる威勢の良い餅つきがよく紹介されます。実際の祭礼本体は「宮上げ」の名が示すとおり、特別に整えたお供えを神社に差し上げる、奉納することです。お供えは祭りの中で最も重要な要素であり、餅つき自体も祭りの一部ですが、内容としては準備作業と言えるでしょう。お供えは、豊か過ぎる食生活に恵まれた現代人にはごちそうとは映らないかもしれません。けれどその準備は神経を使い、手間隙のかかる祭り最大の苦勞でもありました。



ウシノシタとオコクサン

刀根の秋祭りにおいて重要なお供えが、祭に先立って準備される「オコクサン」です。これは祭の前日の「ゴクムシ」と呼ばれる、関係者以外の方立ち入りを禁じた最も厳粛な儀式の中で整えられます。

刀根の祭ではトウヤ（頭屋・祭り当番）が東西二軒あり、祭の主催者として重要な役割を勤めます。このトウヤの家では、祭の数日前からお米をお櫃に入れて甕でくみ、床の間に吊るしておきます。このお米を祭の前日の朝に儀式と同じゴクムシの名で呼ばれる役割の年配女性に渡します。ゴクムシさんは米を洗って水につける等の準備をして、夜のゴクムシの儀式で米を蒸し上げます。

蒸し上がった米はゴクムシさんとモチトリ（主務委員、祭の段取り確認役）の男性二人でくみ冷まして冷まします。これを再びお櫃に戻し、甕でくみおきます。そしてショードン（正殿）と呼ばれる男の子に

### 田の神祭り子ども祭り

尻餅をつかせます。こうして無事にオコクサンが蒸し上がる。太鼓を鳴らして村中に知らせます。かつて地区の人々はゴクムシの儀式の間中、家に籠って物音も立てないよう静かにして、オコクサンが蒸し上がるのを待ったと言います。

お供えは種類や形だけでなく、段取りも重要であったことを教えてくれる風習です。同時にこの独特のゴクムシの儀は、お供えを作るといっただけでなく、オコクサンに託された田の神（稲霊）のイメージを醸成しています。

田の神は稲作の守り神、あるいは稲の生命力そのものとも言える存在と考えられています。この田の神の、一年の農作業の守護に感謝し、食物や休息を以てその再生を促すという意義のある祭りが田の神祭り、民間新嘗祭などとされています。



行列に使われる様々な道具

他の地域の事例では、田の神は種籾に宿るとされることが多いようです。これを大切に取扱うのはもちろんですが、高い所に吊るす、女性が取り扱ふの担当者であると言った刀根の祭りと共通事例も見出すことが出来ます。オコクサンが単なるお供えを越えた意義を持つことが推測できるのです。

こうして整えられたオコクサンは、ウシノシタと呼ばれる真ん中がくびれた楕円形のお餅と一緒に甕に入れ、甕にくるまれます。この他に小豆を混

ぜて搗き、薄く伸ばして短冊形に切ったアカモチを、干し柿と昆布（東座）するめ（西座）とともにひっくり返したお櫃のふたに並べます。

こうして苦労して出来上がったお供えを、様々な道具とともに刀根の氣比神社へ奉納します。祭りのメインイベントである奉納の行列は、子どもが中心であることも大きな特徴です。

祭りの主役ともされ、腰に褌製の鍋つかみを下げたショードンに、お櫃のふたのお供えの下を歩くヒツノフタ（低学年くらいまでの女の子）、御幣を保つタユウ（高学年・中学生くらいの子）、腰でひげを巻かれたスミヤキ（小さい男の子）といった役の子どもたちが中心となって、皆で神社まで行列するのです。



子どもたちを中心とした行列

この祭りは本当に複雑で、お供えだけでなく道具も多く、田の神祭りの要素以外にも意味があると考えられます。ちなみに刀根では近年、祭りの主な会場を各トウヤ宅から区の公会堂に移しました。

それでも餅つきの杵と臼からお供え、諸道具、行列まで、変わらずに東座と西座の分が仕立てられています。

（若狭路文化研究会 高早恵美）

## 予算総額(一般会計)9,060万円

## 6 重点施策

22年度予算は、総額(一般会計)9,060万円とし、重点施策を重点に予算配分を行い、事業費総額7,530万円を計上。財団寄付行為で規定している事業区分の内訳は次のとおりです。

1. 地域文化の振興事業  
2,030万円
2. ふれあい・ゆとりの創造事業  
990万円
3. 芸術鑑賞機会の提供  
文化創造事業 3,330万円
4. 優れた文化活動に対する  
顕彰事業 700万円
5. その他の事業  
(ホームページ、広報誌の発行など)  
480万円

1. 文化団体等の活動を支援する助成事業の充実
2. ふくい県民総合文化祭および県内高等学校文化部活動の支援
3. 地域に根ざしたふれあい活動の推進
4. 文化、芸術を愛する県民風土を高める顕彰事業の定着化
5. 魅力ある文化イベント提供事業の推進
6. 信頼される財団として広報・広聴活動の展開

## 平成22年度の財団事業計画・予算決まる

文化の育成支援など6種施策を展開

平成22年度における財団の事業計画と収支予算は、3月11日に開催した第37回評議員会と第36回理事会で可決承認されました。平成22年度の財団の基本方針として中・長期的視点にたち、22年2月に本県の文化振興策に関する「教育・文化ふくい創造会議」の提言が知事に提出され、財団としては、これまで培ってきた実績を生かし、県における新しい時代に対応する文化環境を踏まえ、県、市町、県内文化団体等との連携を密にし、地域に根ざした信頼される財団として、次の6重点施策を中心に効果的な事業計画と予算を編成しました。



平成22年度事業計画および予算を審議する第36回理事会

第74回

## 福井県書きぞめ競書大会

げんでんふれあい福井財団特別協賛



席上揮毫に挑む小学生、福井市湊小学校  
(福井新聞社提供)

第74回かきぞめ競書大会(福井新聞社主催、(社)若越書道会共催、当財団特別協賛)に今年は県内の小学生から大学生まで、6万9878点の応募がありました。第一次審査を通過した2555人が、1月30日県内12会場で席上揮毫に臨みました。席上揮毫の審査は翌31日若越書道会の河合清仙会長ら審査員により慎重に行われました。その結果、最優秀の大賞に天谷鈴華さん(東藤島小)、坂井佑衣さん(金津中)、岩佐章弘さん(北陸高)、山内佳高さん(福井大)の4人が選ばれ、また推薦147点、準推薦221点、奨励



表彰式で財団賞を受ける受賞者  
(福井新聞社・風の森ホール)

賞27点が決まりました。2月11日、福井新聞社・風の森ホールで表彰式が行われ、財団では、小・中学生の推薦作品の中から山本なおさん(立待小)ほか10人に「げんでんふれあい福井財団賞」が加藤理事長より贈られました。

第12回

## ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品展

「みつめてみよう～ふるさとふくい」をテーマに



入賞作品を鑑賞する人たち  
(げんでんふれあいギャラリー・敦賀市)

当財団主催の第12回ふるさと大賞写真コンテストの入賞作品展を2月2日から2月14日まで、げんでんふれあいギャラリー(敦賀市)で、2月19日から2月24日までショッピングシティ「ベル」(福井市)の2会場で開きました。会場に、応募作品750点の中から選ばれた、ふるさと大賞1点ふるさと賞2点優秀賞4点をはじめ59点の作品を展示しました。

審査委員長の八木隆さんは、「今回の出展作品は、「景り」を素材に選ぶ傾向が見られ、デジタ



力作に見入るファン  
(ショッピングシティ「ベル」・福井市)

対する工夫が必要ですが、入賞された作品は相当に「写真力」が具わっています。次回も良い作品創りに励んで下さい」と総評しました。両会場とも多くの人が訪れ、感性豊かな作品に見入っていました。

第10回

日英小学生絵画交流展

—日常のくらしを描いた作品—

日本とイギリスの小学生の絵画交流展を当財団と日本原電、INS（英国国際原子力サービス会社）が共催して12月5日から13日まで敦賀原子力館で、12月15日から27日までげんてんふれあいギャラリー（敦賀市本町2丁目）で開催されました。作品展には、英国、西カンブリア地方、セラフィールド近郊の6小学校



日英小学生絵画交流展開会式（敦賀原子力館）

から71点の作品と、敦賀市内5小学校（中郷・栗野・栗野南・黒河・赤崎）から38点、茨城県東海村から36点、計145点が展覧されました。「私たちのくらし」をテーマにした作品は、家族や友達、学校の様子などそれぞれのお国柄が描かれた楽しい作品が多く、会場を訪れた人達は、これらの絵を熱心に鑑賞していました。



日英の友好を深めた絵画交流展（敦賀原子力館）

第12回

狂言を楽しむ会

古典芸能を堪能

財団では、日本古来の伝統芸能に触れていただくため、人間国宝の茂山千作師一門を招き「狂言を楽しむ会」を11月4日、昼と夜の部に分け、敦賀市プラザ萬象の能楽堂で開催しました。当日昼の部では、敦賀市の中学生（気比・松陵・西浦）約380人が体験学習の一環として狂言を鑑賞しました。敦賀市の中学生が、在学中の3年間に一度は能・狂言を鑑賞することで



「佐渡風」を演じる茂山千作さんと茂山正邦さん

企画。公演に先立ち狂言師茂山逸平さんから狂言の舞台構成はじめ、小道具の使い方、泣き、笑いの演技などについて解説が行われた後、「柿山伏」と「附子」の2曲が演じられました。附子は小学校の教科書にも登場する有名な狂言だけに馴染深く、役者の滑稽な仕草に会場から笑いが湧き、大きな拍手が送られました。夜の部では一般のファン約450人の観客が会場を埋め、「佐渡風」「文荷」「金腰左衛門」の3曲が演じられました。

小浜市連合婦人会「婦人のつどい」

本村健太郎氏「行列のできない法律相談所」

小浜市連合婦人会主催（当財団共催）の平成21年度「婦人のつどい」が2月7日（日）小浜市文化会館で吹奏楽演奏や手芸・生花・原子力・環境展、乳がん検診など多彩な内容で盛大に開催されました。地域の活性化と輝いている女性を目指して活動している同婦人会の心意気を示す恒例のアトラクションでは、11地区の婦



本村弁護士講演

人会が衣装や仮装に工夫を凝らして踊り、歌、寸劇などに子供達も参加して、元氣いっぱいお楽しみを繰り広げました。会場のお客さんから盛んに拍手が送られていました。記念講演は、テレビでお馴染みの本村健太郎さんが「本村弁護士の行列のできない法律相談所」と題して、弁護士の立場で女性の権利・裁判員制度、困った相談内容のベストや俳優の立場で出演中のテレビの裏表等を楽しく語り、約800人のお客は、熱心に関心入っていました。

第33回

平成21年度 福井県新人演奏会オーディション

若手演奏家が登壇に挑む

県文化振興事業団主催の平成21年度県新人演奏会公開オーディションが、2月21日県立音楽堂で開かれました。この演奏会は、本県出身者および県内在住の音楽家を育成する目的で、毎年度開かれ、若手演奏家の登壇となつていきます。今年のオーディションにはピアノ、声楽、器楽、作曲の4部門に音楽系大学生、卒業生のほか高校生3人を含む38人の応募があり、規定の時間内に日頃練習を重ねた成果を披露しました。審査ではピアノの山岸ルツ子さんが当たりピアノ部門で5人音楽部門で1人器楽部門で10人の合計16人が合格しま



練習の成果を発表する参加者

した。3月21日には同音楽堂でオーディションに合格した新人演奏者による演奏会が開かれ、会場からは将来有望な若手演奏家に大きな拍手が送られていました。